

人はいかにしてキリスト教を信ずるに至るか

——ウイトゲンシュタインの、愛としてのキリスト教信仰——

鈴木 祐丞

序

言うまでもなく、新約聖書はキリスト教の聖典である。キリスト教徒は、そこに書かれていることを、信仰によって受け容れる。翻つて、非キリスト教徒が新約聖書をひも解くとき、非キリスト教徒は、そこに包有されている倫理的な教えや史話のうちには現実味を見出しうるものの、それ以外の多くの話には躓かされざるを得ない、ということを知る。例えば、イエスが「風と湖とお叱りになると、すっかり風になつた」(マタイによる福音書8:26他)といった奇跡の話や前にしたとき、非キリスト教徒は、それを受け容れることができないうところか、冷笑や嘲笑すら禁じ得ないだろう。そのような奇跡の話はさておくとしても、神人イエスはその死により人間の罪を贖つた(マルコによる福音書10:45他)というキリスト教の中心的な考えすら、非キリスト教徒にとつて

は、何ら実感のない遠い国の説話のようにしか響かないのではないか。

ウイトゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein) の言葉を借りれば、おそらくこういうことなのだろう。「信仰は信じることから始まるのだ。信じてから始めなければならぬ。言葉からはいかなる信仰も生まれない」(D, p. 151)。非キリスト教徒が聖書をいくら読んだところで、それによつて信仰が生まれるなどということはない。まず信仰があるのであつて、信仰が聖書を聖典とし、信仰がイエスの贖罪の死を実感を持つて受け容れることを人間に可能にするのだ。

ならば聞きたい。ではその信仰はそもそもいかにして生じるのか、と。これが本稿の主題である。すなわち、人はいかにしてキリスト教を信ずるに至るのか、人はいかにしてキリスト教と接点を持つに至るのか。本稿は、この問いに対し、ウイトゲンシュタインの宗教思想に即して、一つの可能な答

えを与えることを試みる。その際、とりわけキエルケゴール (Søren Kierkegaard) との対比において、そのワイトゲンシュタインの宗教思想を特徴づけてみたい。

以下では、まず、ワイトゲンシュタインにとつてキリスト教を信ずるとはいかなる事であつたのかを明らかにする(第一章)。その上で、ワイトゲンシュタインが、人間はそのようなキリスト教信仰をいかにして有するに至るものと考えていたかを、明らかにしたい(第二章⁽¹⁾)。

一 キリスト教を信ずるとはいかなる事か

まず、ワイトゲンシュタインにとつてキリスト教を信ずるとはいかなる事であつたのかを明らかにする⁽²⁾。

ワイトゲンシュタインのキリスト教信仰観は、次の引用のうちに代表的に示されているものと思われる(他に CV, p. 53, LC, p. 54 参照)。

宗教の信仰とは、あるひとつの座標系を情熱的に受け容れることにつぎるのではないか、と思われる。それゆえ、それは信仰ではあるのだが、それは実際にはひとつの生き方、あるいはひとつの生の判断の仕方なのである。(CV, p. 64)

キリスト教を信ずるとは、人間の原罪・神が人となったという絶対的逆説・キリストの贖罪の死による神と人間の和解・最後の審判・天国と地獄といった、キリスト教的世界観・人間観という座標系を、情熱的に自らのものとして生きることなのである(いかにしてそれが可能かは次章で考察する)。それはすなわち、キリストによる啓示を媒介として、我々の時間的な生のあらゆる物事に、永遠的な意義を付与することに他ならない。あるいは、キリスト教を信ずるとは、キリスト教的世界観・人間観という言語ゲームが織りなすまったく新しい生活形式のうちへと飛び込んでゆくことなのである、とも言えよう(D, p. 161)。

さて、このようなワイトゲンシュタインのキリスト教信仰観には、以下に述べるような二つの特質が存しているものと考えられる。

ワイトゲンシュタインのキリスト教信仰観の持つ特質の一点目は、彼の次の言葉のうちに明示されている。

奇妙なことのようだが、福音書のなかの歴史的記述は、歴史的に言って、明らかに誤りでありうるのだが、それでも信仰はこのことよって何も失わないであろう。：なぜなら、歴史的な証明(歴史的なプルーフ・ゲーム⁽³⁾)

は、信仰とは無関係だからだ。このメッセージ（福音書）は、人びとによって、信じるといふ仕方である。すなわち、愛するといふ仕方（で）、掴まれるのである。それが、ほかの何かではなく、この特定の真理としての受容を特徴づける確信なのである。／信する者のこれらの物語「福音書」への関係は、歴史的真理（蓋然性）への関係でもなければ、「理性の真理」により構成される理論への関係でもない。そのようなものがあるのだ。（C.V. p. 32）

すなわち、ウイトゲンシュタインによれば、キリスト教を信ずるとは、キリスト教の説く世界観・人間観（座標系）を、それらの蓋然性の高低の如何にかかわらず、情熱的に受け容れることなのである。

キリスト教の説く世界観・人間観を情熱的に受け容れるという意味でキリスト教を信ずることと、それらの蓋然性の高低とは、別のものである、ということに関して、ウイトゲンシュタインにも少し説明してもらおうことにしよう。ウイトゲンシュタインは宗教的信念と歴史的真理（蓋然性）の相違についての詳細な考察を行っており、その講義の記録が残されている（L.C. pp. 53-72）。彼はその中で、その相違を浮き彫りにするために、次のような思考実験を行っている。

たとえば、未来を予見する人びとを我々が知っていたと想定せよ。彼らは何年も何年も先のことを予測し、そして、彼らは最後の審判のようなものを描写した、と想定せよ。非常に奇妙なことだが、そのようなことがあるとしても、そして私が描写する以上にそれが説得的であるとしても、それでも、それでもそれが生ずることについての信念は、まったく宗教的信念ではないであろう。（L.C. p. 56）

この思考実験は次のように敷衍することができる。たとえば、福音書に書かれているあらゆる事柄について、何かの実証的な研究により、その蓋然性が可能な限り高まったとする。イエスが、風と湖を叱って凧にするなどなどの奇跡を行い、また十字架の死から肉体がよみがえるという仕方で復活したのは、今やほぼ事実である。同時に、これまでありとあらゆる事柄について正確に未来を予言してきた人が、最後の審判などキリスト教が予見する諸事態が未来の特定の日に実際に生ずることを予言したとする。さて、ここで気付かれるのは、それらの蓋然性の高まりが、必ずしも我々をしてそれらを情熱的に受け容れるよう促すわけではない、ということである。はたして、我々は、イエスの奇跡・イエスの

復活・最後の審判の蓋然性が最高度まで高まったときに、必ずキリスト教という座標系を情熱的に自らのものとして実際に生き始めるであろうか。もう少し具体的に言えば、たとえば、神による万物の無からの創造に始まり、人間の原罪を経て、最後の審判と永遠の生命に収斂するキリスト教の救済史が、現在の世界史の代わりに、知識として学校で教えられるようになったとして、我々は、必ず、最後の審判においての裁きを指標として、自らの罪に細心の注意を払いつつ、一日一日を実際に生きるようになるであろうか。答えは否であろう。もちろんそのように実際に生き始めることは十二分に考えられるもの、実際に生き始めないこともまた十二分に考えられる。このことが示すのは、キリスト教の説く世界観・人間観を情熱的に受け容れるという意味でキリスト教を信ずることは、それらの蓋然性の高低と、別のものである、ということなのである。

ところで、そのことが含意するのは、キリスト教の説く人間観・世界観の蓋然性がどれだけ低くとも、人間はそれを情熱的に受け容れるという意味でキリスト教を信ずることができるといえる (IC, pp. 57-58)、ということである。現実には、聖書に記されている事柄は、あまりに蓋然性が乏しいであろう。しかしそれでも、ワイトゲンシュタイン的に言えば、人間は、それに基づいて宗教的信念を築くことが出来るのである。

誠実に宗教を考える人間は、まるで綱渡り師である。彼は、ほとんど空気の上を歩いているかのように見える。彼の支えは想像しうる限りでもっとも細い。しかしそれでもその上を歩くことが実際に可能なのだ。(CY, p. 73)

ワイトゲンシュタインのキリスト教信仰観の持つ特質の二点目は、彼の信仰観を、イギリスの宗教哲学者ヒック (John Hick) の宗教多元主義思想と対置した時に、鮮明に浮かび上がってくる。

ヒックによれば、宗教多元主義とは、諸宗教の多様性と諸宗教に見られる共通性という事態を説明するために、帰納的に導かれた仮説である (Hick (1985), pp. 283-7)。世界には、たとえばキリスト教・仏教・ユダヤ教・イスラム教・ヒンドゥー教といった、多様な宗教が存する。一方で、「自我中心から実在中心への変革」(Ibid., p. 29) (一般に、宗教性あるいは霊性への目覚め) を促すという点で、諸宗教は共通的であるように思われる。こうした事態は、特定の宗教に唯一の正当性を与え、その宗教と他の諸宗教との相違を、その宗教を中心とした視点から消極的に解釈することにより、説明することも可能である。このような態度は「排他

主義」あるいは「包括主義」という形態をとる (Hick (1985), pp. 31-34)。対照的に、諸宗教のうちに見出される「自我中心から実在中心への人間存在の変革」という事態を、あらゆる宗教の根源的本質としての「究極的実在」への多様な形態での応答として捉えることにより、あらゆる宗教に正当性を付与しようとするところに成立するのが、宗教多元主義という考え方である。「多元主義は、そこで、自我中心から実在中心への人間存在の変革が、すべての偉大な宗教的伝統の文脈のうちで異なった仕方で行われている、という見方である」(Ibid., p. 34)。ちなみに、諸宗教の多様性を生み出すのは文化的要因とされる (Ibid., p. 26)。

さて、キエルケゴールは、『非学問的な後書』において、キリスト教を、普遍的な宗教性との対比から、特徴づけている。人間が自らの本来的な存在の次元たる永遠と関わるところに成立するのが普遍的な宗教性(宗教性A) (SKS 7, pp. 352-504)であり、それを前提としながら、さらに、神人キリストによる啓示を受け容れるところに成立するのがキリスト教(宗教性B)である (Ibid., pp. 511-533)。キエルケゴールのこれらの概念を用いれば、ヒックの宗教多元主義思想は、キリスト教の本質を、キエルケゴールとは対照的に、宗教性Aのうちに見出すものである、と言える。「究極的実在」あるいは「自分を包んでいる、自分を生かしている、大きな

目に見えない働き」を感じるということと普遍的な宗教性(宗教性A)こそがあらゆる宗教の根源的本質なのであり、それがキリスト教を中心にして解釈されてキリスト教という形態をとるか、たとえば仏陀を中心にして解釈されて仏教という形態をとるかは、それぞれの文化によって左右される表層的な差異にすぎないわけである。これとは対照的に、ウイトゲンシュタインは、キエルケゴールの精神と合致して、キリスト教の本質を、あくまで宗教性Bのうちに、すなわち人間が神人キリストによる啓示を受け容れることの中に、見ている、と言える。というのも、キリスト教的 worldview・人間観という座標系を情熱的に受け容れるという事態が示すのは、まさに、人間が神人キリストによる啓示を受け容れるということに他ならないからである。この点に、ウイトゲンシュタインのキリスト教信仰観の有する、いま一つの特徴が存しているのである。

二 人はいかにしてキリスト教を信ずるに至るか

では、ウイトゲンシュタインは、人はそのようなキリスト教信仰をいかにして有するに至るものと考えていたのであるか。

ウイトゲンシュタインは一九三六年夏から翌年の四月まで

単身シヨルデン（ノルウェー）の山荘に滞在した。彼は、そこで、『哲学探究』第一部 §§ 1-188 にほぼ相当する手稿ノート⁵の作成という哲学的仕事と並行し、自らの生のあり方とキリスト教の可能性について真剣に思索を深め、その思索を日記にしたためた。この日記のうちに、我々は、なかならず、ワイトゲンシュタイン自身がいかなる仕方でもキリストによる贖罪というキリスト教の中心的な教えを情熱的に受け容れるに至ったかを、見出すことができるのである。⁶

その道のりは、彼が自らの罪責に真剣に向き合うところから始まる。彼にとつての罪責とは、とりわけ、自らに根深く巢食う「虚栄心」(D, pp. 85, 130-131 他) であつた。彼は、良心により「自分自身が惨めな人間であるということ」が自らに示されるに至るほどにまで、自らの罪責を認識するのである (D, p. 148)。自らが根深い罪責を持った惨めな人間であるということ⁷を認識するということは、決して生易しい感傷的な事態ではなく、善く生きようという絶大な真剣さを伴つて初めて可能な事態である。そして、その認識においてこそ、人間はキリスト教と接点を有するのである。こうした事柄に関して、後年（一九四四年）のワイトゲンシュタインの手稿には次のような記述がある。

中途半端に立派な人はみな、彼自身をまったく不完全で

あると考えるであろう、しかし、宗教的な人は、彼自身を惨めであると考えるのである。(CV, p. 45)

キリスト教とは、無限の救いを必要とする人間にとつてのみ、すなわち、無限の苦悩を経験する人間にとつてのみ、存在するのである。／＼キリスト教の信仰とは……この無限の苦悩における人間の避難所なのである。(CV, p. 46)

すなわち、善く生きようとしてある程度まで努力をする人は、もつと真剣にそのことに取り組む余地が残されていると、いうことを知っているので、自らを不完全であると見なすであろう。このような人は、たしかに立派ではあるが、中途半端である。対照的に、最高度の真剣さをもつて善く生きることに尽力し、その結果、これ以上努力をする余地がもはやどこにも見出され得ないにもかかわらずそれでもやはり自らの罪責が存在し続けているということ（ワイトゲンシュタインの場合でいえば、それでも虚栄心がうごめいているということ）を認識するとき、はじめて自らを無限の救いを必要とする惨めな存在として認識するのであり、その認識においてこそキリスト教が救いの可能性として現れうるのである。このことは日記には次のように記されている。

私の信じるところでは、「聖書には」「お前たちは今赦されたのであり、『今後はもう』罪を負っていないのだと信じよ！」と述べられているのである——しかしこの信仰が一つの恵みであることもまた明らかである。そして私の信じるところでは、信仰の条件とは、我々がなしうるすべてをなし、同時に、それが我々には何ももたらさず、どれほど我々が苦しもうとも、我々の罪は赦されぬままである、ということを見ることである。その時に赦しは正当となるのである。(D, p. 220)

ワイトゲンシュタインは、それまでキリストによる贖罪についての信仰を持つことができずにいた (D, pp. 186, 193-194)。しかし、善く生きようという真剣な尽力の末の自らの惨めさについての認識という「信仰の条件」を満たしたとき、彼は、キリストによる贖罪についての信仰へと到達することになるのである。

特筆すべきことに、ワイトゲンシュタインは、こうしてキリストによる贖罪についての信仰に到達した際に、キリスト教を信ずること (キリスト教というひとつの座標系を情熱的に受け容れるということ) の内実を、キリストを愛するというこのうちに見出すに至っている。

キリスト教教義の一解釈。完全に目覚めよ！ そうするならお前は自分が役に立たないことを認識し、それによってお前にとつてこの世界の喜びは止む。お前が目覚め続ける限りそれが再び戻ってくることはありえない。そこでお前には救いが必要となる。救いがなければお前は見捨てられたままである。でもお前は生に留まり続けなければならぬ (そしてこの世はお前にとつて死んでいる)、それゆえお前にはどこか他の場所からの新しい光が必要となる。∴だからお前は自分が死んでいることを認識し、別の生を受け取らなければならない (ということもそれがなければ、自分が死んでいることを認識すれば絶望しなければならぬからである)。∴—そしてこの生が完全な者「キリスト (D, pp. 213-214)」に対する人間の愛なのである。そしてこの愛が信仰なのだ。(D, pp. 232-233)

人間が、善く生きようという真剣な尽力の末に自らの惨めさを認識するに至りながらも、絶望の淵に沈みこむのではなく、この世の生を享受するべきであるならば、人間にはどうしても救いが必要である。ここにキリストによる贖罪が現れる。そして、それを情熱的に受け容れるところに開かれてく

る人間の新しい生が表現するのは、キリストへの愛と呼ばれべきものである。どういふことか。十字架の死をつうじて人間の罪を贖い神との和解を人間にもたらしたとされるキリストを、自分自身の惨めさに救いをもたらす存在として情熱的に受け容れる人間は、そのキリストによる贖罪の死に与るのにふさわしい自分であろうとこの世の生を生きるはずであり (D, p. 219)、その時のその人間の生が体现するのはキリストへの愛なのだ、ということである。こうして、キリスト教を信ずるといふこと (キリスト教というひとつの座標系を情熱的に受け容れるといふこと) の内実とは、つまるところ、キリストを愛するといふことなのである (CY, p. 33)。

結び

我々は、人はいかにしてキリスト教を信ずるに至るかという問いを立て、ワイトゲンシュタインの宗教思想に即して、その可能な答えを探ってきた。その答えは、次のようにまとめることができよう。ワイトゲンシュタインにとつて、キリスト教を信ずるとはキリスト教というひとつの座標系を情熱的に受け容れることであり、そのような信仰は、なかならず、善く生きようという真剣な尽力の末に訪れる惨めさの認

識を媒介として、自らの死を通じて人間の罪を贖ったキリストを愛するようになるときに、実現されるのである。

最後に、キリスト教の信仰の内実をキリストへの愛のうちに見出すことのうちに存する意義を、指摘しておくことしたい。ワイトゲンシュタインは、この点に関して、次のように日記に記している。

「信じる」といふ言葉によつて恐ろしいほどたくさんの災いが宗教に引き起こされたとは私は信じる。歴史的事実の永遠の意味という「パラドックス」やそれに類することに関するあらゆる込み入った思考がそうだ。「キリストを信じよ」といふ代わりに「キリストを愛せ」といふなら、パラドックス、つまり悟性をいらだたせるものは消滅する。悟性をその様にくすぐることが宗教に何の関係があるのだ。：／だから今やすべては単純なのだ、あるいは、分かりやすいのだと言える、という訳ではない。分かりやすいものなど何も無い、ただそれらは理解不可能なのではないだけだ。(D, pp. 238-239)

ワイトゲンシュタインがキリスト教信仰へと至つた上述の道程において、彼がたえずケルケゴールを読み信仰への導きとしていた (D, pp. 166, 176, 204, 211) ことを考えたとき、

ウイトゲンシュタインのこの引用における批判の矛先は『哲
 学的断片』におけるキエルケゴールの思想に向けられている
 のではないかという推察は、的外れなものではない。実際、
 キエルケゴールは、同書において、神が人となったという逆
 説、すなわち歴史的事実の永遠の意味というパラドックスに
 ついて、「瞬間」という概念を軸にして思考を繰り広げ、悟
 性にとつての躓きである神人キリストを、悟性を放棄する
 ことにより情熱に信すべきことを力説している (SKS 4, p.
 261)。ウイトゲンシュタインは、信仰とは情熱であるとい
 点に関してはキエルケゴールに完全に同意しているが (CV,
 pp. 53, 56)、キエルケゴールが悟性を放棄して信ずることを
 強調する点に関して、上掲の引用において、キエルケゴール
 に異を唱えているのである。人間がキリスト教を信ずるに至
 るために重要なのは、それが我々の悟性を超えたパラドク
 スであり我々はそれを悟性的認識を放棄することにより受け
 容れねばならないという仕方での導きなのではなく、むしろ、
 我々の救いのためにこの世に来て我々の罪を贖うために
 十字架に掛けられたキリストを愛するように生きよ、という
 導きなのではないか。このように、悟性的認識との対比とい
 う図式のうちから信仰を解放するところに、ウイトゲンシュ
 タインの、愛としてのキリスト教信仰の意義が存するのであ
 る。

参考文献 (併記されている邦訳を適宜用いた)

ウイトゲンシュタインの著作からの引用に際しては、下記の略号を用
 いた。

LC: *Lectures and Conversations on Aesthetics, Psychology, and Religious
 Belief*, Blackwell, 1966. (丘沢静也訳 (一九九九) 『反哲学的断章—文
 化と価値』青土社)

CV: *Culture and Value*, G. H. von Wright, ed., The University of Chicago
 Press, 1980.

D: *Denkwegungen: Tagebücher 1930-1932, 1936-1937*, Somerville, I., ed.,
 Haymon-Verlag, 1997. (鬼界彰夫訳 (二〇〇五) 『ウイトゲンシュ
 タイン 哲学宗教日記』講談社) 引用に際してのページ番号には、原
 本のページ番号を用いた。

キエルケゴールの著作からの引用は、『批評的新版全集』(Soren
Kierkegaard's Stryfer, bd. 1-55, København 1997.) に拠り、略号
 (SKS) 巻数・頁数の順に記した。

Hick, John (1985), *Problems of Religious Pluralism*, The Macmillan Press.
 (間瀬啓允訳 (1990) 『宗教多元主義—宗教理解のパラダイム変換』
 法蔵館)

Schönbammsteld, Genia (2007), *A Confusion of the Spheres: Kierkegaard
 and Wittgenstein on Philosophy of Religion*, Oxford University Press.

注

- (1) 本論文は、スカンジナビア・ニッポンササカワ財団の助成により
 なされた研究の一端である。記して謝意を表したい。
- (2) ウイトゲンシュタインのキリスト教信仰観の理解に際して、古田
 徹也 (二〇〇六) 『科学の時代の信仰—宗教的信念に関するウイ
 トゲンシュタインの議論に即して』『倫理学紀要』巻 14, pp.

(2889)には助けられるところが多かった。同論文を提供して下さった氏のご厚意に謝意を表したい。

(3) 将棋やチェスで、指し始めの局面からある局面に至る手順を求めるパズルのこと。

(4) ただし、後述のように、ワイトゲンシュタインは、キェルケゴールが悟性を放棄して神人の逆説を信じることを強調する時、キェルケゴールに同意しない。

(5) その日記(一九三〇年から三二年までの記述も含む)は、ワイトゲンシュタインの死後四二年を経た一九九三年に発見され、一九九七年に原語であるドイツ語で (*Denkwegungen: Tagebücher 1930-32, 1936-37*)、その後二〇〇五年に日本語訳が出版された(鬼界彰夫訳『ワイトゲンシュタイン 哲学宗教日記』)。

(6) 同日記の邦訳(鬼界彰夫訳『ワイトゲンシュタイン 哲学宗教日記』)に収められた訳者解説「隠された意味へ」(pp. 272-317)によれば、同日記のうちには、ワイトゲンシュタインがいかかにしてキリストによる贖罪についての信仰へ至ったかとともに、神による世界の創造についての信仰へ至ったか、見出すことができる(pp. 295-308)。本稿の以下の記述は、このような内容をもつ日記の全体を、キリストによる贖罪についての信仰への道(後述する愛としてのキリスト教信仰への道)という限定された視点から、捉えたものである。

(7) 「隠された意味へ」(注8参照)によれば、それは、一九三七年三月二六日のことであった(p. 303)。

(8) その道程にあったワイトゲンシュタインにとって、キェルケゴールとは、時間的生のあらゆる物事を神のために犠牲にし、またそうすることを読者に要求する、理想的キリスト者であった(D, p. 166他)。なお、ワイトゲンシュタインは、自らの哲学的仕事(『哲学探究』に収斂する言語哲学の仕事)を神のために犠牲にすることができるといふ考えに思い悩み(D, p. 178-185他)

ながらも、最終的には理想に比しての自らの低さをそのまま認容する「あるがままの私の宗教」(「隠された意味へ」(注8参照) p. 302)のうちに救いを見出すに至る(D, p. 227)。

(9) ただし、ワイトゲンシュタインがキェルケゴールの著作を所有していたのは確実であるものの、その中に『哲学的断片』が含まれていたか否かは定かではない(Schönbaumsteidl (2007), pp. 12-21)。

すずき・ゆうすけ 筑波大学大学院博士課程
人文社会科学研究所 哲学・思想専攻